

私のリハビリ・アイデア

今年(昭和六十二年)の九月で発病してちょうど二年になるんだと、新年に考えた。

思えば札幌で発病したときは、勧められて、すぐ病院に行き、早期に治療を受けたおかげで、これだけ回復できたのだと感謝している。もし、手当てが遅れていれば、「今年は三回忌になるところだった」というのが冗談でなくなっていたかもしれない。

最近のリハビリはまた一段と進歩して、主治医の塩田先生やリハビリの大川先生からは、「君の運動の機能回復は五年は続くだろう。三年くらい先に社会的活動を再開するつもりでしっかり充電しなさい」と言われたのはうれしかった。

リハビリは、その人の病状や生活に合わせた、その人なりの方法があると思う。私のやり方が、どなたにも参考になるとは思えないが、意外に効果の上がった「仕事」や、専門家に教えられたわけではない訓練法など、何かのお役に立てばと、ご紹介してみたい。

私のリハビリ訓練の特徴は、あまり特別の器具や場所で行わないということだろうか。身近な道具や、だれでも行けるところを利用してある点が、あるいは参考になるかもしれないと思う。

写真集を出版する

私は、「自分の回復の水準に合わせて絶えず目標を持ちながら、私が社会に復帰できる日を待つ」ときめて工夫を凝らし始めた。

しかし、あれこれ考えても半身不随の私に、できることはなかなか見つからなかった。そんなある日、テレビに、たまたま北海道の美しい風景が映し出された。広い緑の原野、真っ白な雪の風景、そのテレビをいつまでも見詰めているうちに、私が北海道時代に撮りためていた写真にも、われながらすばらしいと思う風景写真がたくさんあったことを思い出した。

「よし、やってみよう」

「私の写真集」を作ってみようという目標が生まれたのである。私自身の記念にもなる写真集を作ってお世話になった皆さんにさし上げ、少しでも喜んでいただこう。

数百枚のポジフィルムを一枚ずつ丹念に整理し、分けてゆく仕事は、不自由な右手も手伝わねばならない。

しかし、目標を見つけた私は、すぐこの仕事に取りかかった。根気のいる仕事が年末から初夏の声を聞くまで続いた。妻や娘の助力がなければできないことが多かったが、数カ月を渡って家族全員が目が写真集の完成という共通の目標に向けられたこと、私が具体的な目標を持って、生き生きと生活し始めたことは、家族にとってもうれしいことだったに違いない。私が障害者になり、暗い気分にな

っていた家庭の中にも、ようやく明るい光が見えてきたのだった。

本屋の店先に並ぶ大家の豪華な写真集を見ては「予算が大変だな」と思い、退職金の範囲で、あまり無理をしなくて収まる小型の判を選ぶことにした。北海道の友人も印刷に協力してくれた。妻と娘の智子は、フィルムの選別から始まり、印刷用紙の選択、レイアウト、装丁を受け持ってくれた。

こうして夏が過ぎ、やっと写真集が完成した。つたない作品かもしれないが、私の人生の転換点を祝うこの記念写真集は、私たち家族にとってもすばらしい共同作業の記念になったのである。写真集『愛しの大地』、こんな標題にした写真集に、多くの友人は初めは驚き、次には称賛を送ってくれた。

後にこの写真集がご縁となって、横浜市友愛病院の柴田哲夫先生と、同じく理学療法助手の市原洋子さん、また後遺症に悩みながら「ちぎり絵」に打ち込んでいる荒井まつ江さんとも知り合う機会が生まれた。以後、このお三人にはいろいろとご指導をいただくようになったが、写真が取り持つ縁というには、あまりにも大きな財産を私は得たのであった。さらに六十三年の秋には、写真の個展を開いたが、これについては後にお話する。

私の後半の人生は、前半に見落としていた大事なものを尋ねる旅にすることができればいいが、と思う。それが何で、具体的にどうするかはまだわからないが、人生を多忙なうちに過ごし、狭い世界しか持っていなかった私が、もっと視野を広げて世界を勉強するための、今は、大事な教育と充電のための時期と考えたい。

そのとき妻は

北海道に行ってから美しい自然に魅せられて、夫が撮りためたネガやポジの枚数は、万単位になっていたと思います。未整理のままだったので、引越しのときも、これだけで一荷物ありました。これをどうにかしなければ狭い家には収まりません。まず、捨てる作業が始まりました。小さな一枚一枚のポジフィルムを見分けて整理します。これもずいぶん時間がかかりました。

大体の作業がすんだころ、「このままでは惜しいから写真集を作ったらどうだろう」と夫が申します。「それも、いい考えね」とみんなで協力して始めることにしました。

この仕事は、初め思った「大変さ」よりも、家族が一つの同じ仕事をする喜びのほうが大きかったのは、想像以上のことでした。また夫にとっても自分にやれる仕事がある「はりあい」を味わうことができたようでした。

完成の喜びはさらに大きく、やはり目標があるのはすばらしいことだとつくづく感じました。

夫はそれからも次々に目標をきめ、それに取り組んでいます。自分の状態に応じた目標を見つける才能は、天才的だと感心して見ていますが、夫に言わせると、これは在職中の訓練の成果だそうです。

これからも夫が目標を常に見つけ、尽きることがないことを私は祈っています。

ラップの中芯で手指の訓練

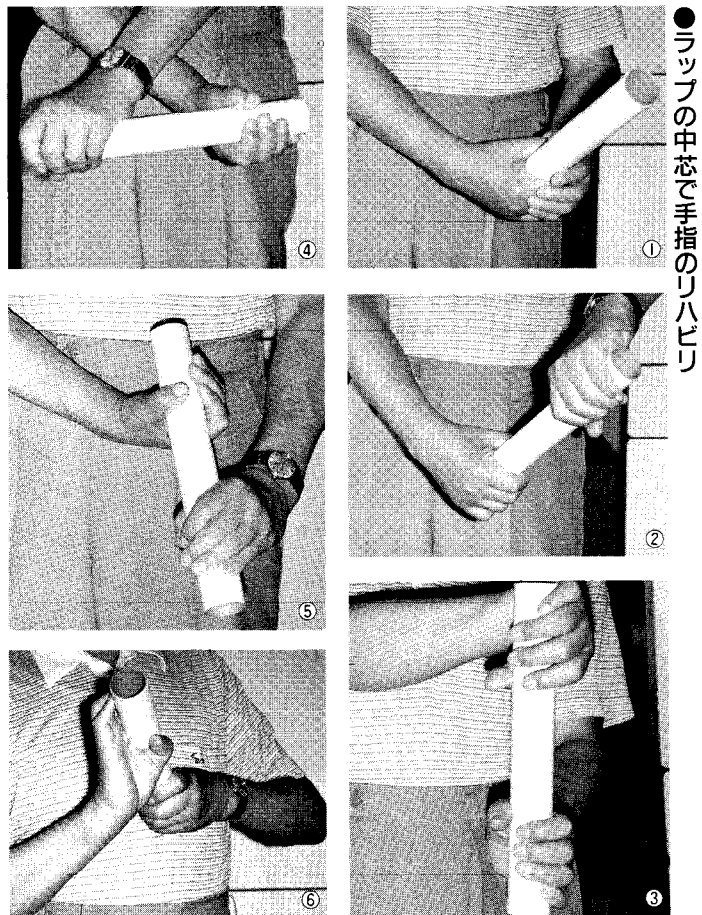
六十二年の六月、保健所でお習字を教えていただいて、右手が筆を持てたという驚くべき体験をして以来、半年の訓練で手首が多少動くようになった。左手の助けで右手が筆を持つということは、外から見ると小さなでき事に過ぎないだろうが、私にとっては洋々たる未来につながる大きなでき事であった。

静かな生活の中では小さなささやきも、かすかなしるしも未来の夢を描かせるには十分だったのである。

このでき事を参考にして、この二年間、使わずに放っておいて固くなっていた手首をやわらげる努力をすることにした。

筋肉が縮み上がって曲がっている指に、ものを握らせるためにはいろいろな工夫を試みた。特に手首の関節をやわらげるためには最大の時間を費やした。だれかと話をしながらも右の手首を左手で動かしたし、トイレで座しているときさえも手首を前後左右に曲げたり伸ばしたりした。

使える道具も工夫して使ってみたが、中でもラップの中芯を利用した運動は効果的であった。あの



●ラップの中芯で手指のリハビリ

手近なものを利用して、気軽にリハビリを心がける。①ラップの中芯の端を両手で握る。②右手はしっかりつかんだまま、左手を端まで動かす。③手首をひねって上下を逆にする。④左手を持ちかえて、両手を交差させたり、⑤上下に動かしたりする。⑥力がついてきたら、できるだけ肘を上げて胸の前で行うようにする。指の動きをよくし、手首の関節をやわらかく、肘に力をつけるのなどに効果がある。

厚紙の丸筒を利用するのである。固く握っている右手の指を一本一本開きながら、この丸筒の一端の端を握らせる。次に左の健康な手で丸筒の反対の端を握りながら、その手を上下、右左に動かす。すると右手は一段と強く丸筒を握りしめる（その際弱い素材だと、筋肉の拘縮でつぶしてしまうから、強くできている「サラララップ」の中芯が最適だった）。両手の間隔は離れているほうが動かしやすい。梃子の原理の応用と違って楽しみながらすればよい。私は車の中にも乗せておいて、助手席に座りながらいつも休まずに動かした。

そこで指を伸ばすために、もう一つ思いついた方法が、ステンレスボールを右の手に握らせる仕事だった。ボールを握るには、親指をボールの上の縁にかけて、残り四本の指でボールの横腹を抱え込む。縮んでいる指は一本ずつ伸ばしてやらないと、ボールを抱えられない。それだけではつまらないから、ボールにもやしを入れて、ひげ根取りをする。指の訓練をしながら家事にも積極的に参加するのである。

肘や肩の大きい筋肉の訓練としては、毎日の体操に加えて、ドアの上の端まで左手で右手を持ち上げ、ドアを押し下したり引いたりしてみた。こうすると腕と脇腹の筋肉が引っ張り伸ばされ、肩の筋肉は盛り上がってくる。

こんな日常生活を送るうちに、左手で右手首を握っていれば、右手に筆を持たせても、かなりの字を書くことができるようになった。六十二年の年末のクリスマスのころには、左手の助けがあれば、筆で名前くらいは書けるほどまで回復してきた。

写経に挑戦して得たもの

退院して二回目の新年、昭和六十三年になると、私も次第に立ち直りの段階を手探りで歩くようになっていたのである。

妻に、「どうかな、今度は般若心経を両手で書いてみたいんだが、できるかな」と相談をしてみた。妻は私が両手で書いた字を見ながら、「できないことはないと思うけど、お経だから粗末にしないようにしましょう」と言いながら用紙の準備をしてくれた。妻が昔、薬師寺に写経を納めたときに書き残した練習用の用紙である。いくら短いお経だといっても、私の今の能力からすると全体の作業量は膨大で、一気には書けない。まだ手に力が不足していて疲れるから、一枚を仕上げるのに四日もかかった。最初は意味はよくわからないままに書いていた。

私はその深い意味を学ぶよりも、ただひたすら書くことに没頭した。

しかし、「色即是空空即是色」というような耳なれた言葉に出会うと、その意味を考えた。一日の作業が終わると、疲れた右手をいたわってあげる。

「つらかったかい」

「いや、それほどでも。それより私(右手)が字を書いたんですね」

翌朝もまた前日の続きを書く。でも、その日によって体の調子や気分が違ったり、墨の色や筆の調子も同じではない。四日かかってようやく書き上げたけれど、それは私の右手が書いたというだけのこ

とでしかなく、作品としてはとても評価できる水準ではなかった。でも日数をかけて一枚ずつ完成させるうちに、何枚目かにはようやく納得のいく作品ができてきた。作品を前にして、妻に抹茶をいれもらいながら、

「右手が書いてくれたよ」

と、右手首から肘にかけて左手でなでてやった。

「よかったわね、思ったよりよくできたんじゃないかって。これ、どうしますか?」

「うん、細川さんに送ってあげて、脳梗塞になった若い人を励ましてもらおうよ」

細川さんは私がまだ係長だった若いころ、年上の友人として親身にいろいろと教えてくださった方である。寮の舎監として細川さんは大勢の若い寮生の生活を指導してきたが、その一人が脳梗塞で倒れて心配していると聞いたので、この写経を見せて励ましてあげて欲しいと思ったのである。

私と同じように人生の途中で病気に倒れた若い人が、人生に絶望しないように、後遺症に悩み、体の不自由を悲しまないように、再び立ち上がるよう励まして欲しいと思ったからである。

「これを書いた男の右手は全く動かなかったんだ。しかし、絶えず回復すると信じて休まず訓練を続けていたら、これができるようになった。君も努力を続けると元気になるよ」と口上を添えて。

こんな成果を目の前に見ると、母が好んで話してくれた「求めよさらば与えられん」という聖書の言葉の意味や、むずかしい般若心経の言葉の端々に、すき通った叡智を見る思いだった。こんな病気をした結果、釈迦やキリストの教えに接する機会がふえてきたことは、私の人生にとって大きいでき事

だと言わねばならない。私が自由に活動できる日までは遠い道かもしれないが、宗教の歴史から見れば、私が出会う障害など何ほどのことであろうかと反省するのである。先人はすさまじい苦難の道を持たずしてすばらしい文化を伝えてきたのだ、とひたすらに頭を下げるのみだった。

友達に、「病気をしたおかげでいろんなことを学んだし、すばらしい世界も見つけることができたよ」と言うと、なんと気の毒なという表情を浮かべて、「そうか。まあ、頑張ってくれ」と励ましてくれたものである。しかし、その言葉と裏腹に「森山もかわいそうに」とか、「森山はやせ我慢してるんだな」と感じているらしいことが見えると、もうそれ以上に、私が見つけ出した世界のことを話すのは遠慮することになっている。仕事こそが人生そのものであると動き回っていたころの私にも見えなかった世界なのである。

そんな私は、「病気という非常手段で、人生の大事を教えられた」というのが、最近のいつわらない心境なのである。

イメージを描いて訓練をする

ゴルフの練習を再開して、いろいろ工夫しているうちに、二十年以上前、私がゴルフを始めたころのことを思い出した。それは私に手ほどきしてくれた先輩が、「ゴルフはイメージをつくらないと、うまくならないよ」と言ったことである。まず、頭の中にゴルフボールが理想的な形で飛んでいくイメージを描く必要があるというのだ。その上で、イメージどおりに打つための技術を磨けば、上達が早

いと教えられた。

「リハビリも基本は同じではないだろうか」

ゴルフの練習をしながら、そんなことを考えた。練習場に付き添ってきてくれた妻に話してみたが、そのとき妻は、必ずしも納得したようではなかった。

その後しばらくしたある日、毎月のこととして妻と市大病院の大川先生のところへ行った。私が待合室で順番を待つ間に、妻は隣のリハビリ訓練室に行ってその様子を見ていた。

帰途、妻を誘って海の見える公園に行き、ベンチに肩を寄せ合ったときのことである。座るなり妻は私に、

「今ね、訓練室をのぞいたでしょう。そしたら訓練士の人が寝ている患者に足を上げなさいって、心の中で上げなさいって。上がっていなくてもかまわないから心の中で足を上げなさいって言うの。どう思う？」

「うーん」

私はすぐには返事もできなかったが、何か私が考えていた方法と同じよううれしくなった。

「あなた、入院しているときにもそんな経験をしたんじゃない。札幌の十三階の皆さんと話しながらやったことがあったわ」

と妻に言われて、私もあることを思い出した。

私はまだ車椅子に乗っていて、先輩の入院仲間からいろんなことを教えてもらっていたときのこと

である。その一人から、

「動かなくてもいいから、膝が上に上がった姿を思い浮かべながら、膝に向かって上に上がれっとなんて言うんだよ」

「ほー、じゃあやってみるか」

私は全身の意識を膝に集めて力いっぱい上げようとしたが、膝はびくともしない。一回、二回、三回、動かない。もう気力も尽き果てようとしたとき、ピクッと膝頭が動いた。

「動いたーっ、動いたぞ」

大きな声にナースセンターから当直の看護婦が何事かと顔を出した。しかし、その後、私は肝臓を悪くして、一切の運動を禁止されたために、このときの成功は長く続けることができずに忘れてしまっていたのだ。イメージを大事にして努力することが、よい結果を生んだ経験を私はすでに持っていたのである。

このことがあって以来、私は毎日歩くときにもこのイメージを持ち続けるようにした。それは外側に大きく振り回す歩き方ではなくて、真っすぐに歩く姿である。そんなイメージを持ちながら右足を一歩ずつ踏み出す。外側に大きく振り回していたのでは街を歩くときに危険だから、真っすぐ歩けるようにしないと行動がいつまでも制限されるからである。足の踏み出す幅も右左が同じになるようなイメージを持った。どうしても悪い足をかばうので、悪い足で体重を支える時間を短くしようとして踏み出す幅も短くなってしまう。

ほかにも歩くときに、足の大きな筋肉が伸び縮みしながら私のマヒしているところにも血液を送っている姿とか、頭の中で神経細胞が次々に新しい通信回路を作っている姿がイメージとして生まれたのである。

人間の持つ能力のすばらしさといえば、小さな子がお母さんを追って、後ろからよちよちと歩く姿が思い出される。マヒのために歩く訓練に入ったばかりのときに私は、「さあ、右足君、上に上げて」、「少し前を出して静かに下に下ろして」、「かかとに体重を乗せて」、「球を転がすように体重を前に移動せよ」、「足の指にしつかりと体重をかけてから後ろにける」、「こんな命令をメートル歩くのに何度も何度も言わねばならなかった。でも、子供は何もそんな命令は出していない。ただ、そこに行きたい、と思うだけなのであろう。人間にはこんなすばらしいシステムがある。私だってこのシステムが回復して動きだせば、ただ「歩こう」と思うだけで自動的に歩けるはずだ。そのためにも、いつも成功して歩く姿をイメージに持つことを欠かしてはいけないと思う。

夢の中でクラブを振る

私のゴルフ歴は、昭和四十年ごろに三重県で先輩から手ほどきを受けたことに始まる。ビギナーズラックの言葉どおりに四十二年の五月のこどもの日に、ホールインワンをやったこともあった。ところが半身不随の体になってから、そのゴルフを楽しむ「夢」を何度も見たものである。

夢の中でも、私は病氣のために長くゴルフができない状態で、久しぶりにゴルフ場に出かけて友人

とプレーをしようとしている。ショートホールでティーショットすると、球はグリーンを直接とらえて軽くバックスピンをしてピンに転がっていく。

「すばらしいショットだ」

「長くやっていなかったけど、ちっとも腕は鈍っていないね」

「もう一発打ってみるよ」

次の球も最初の球の側に落ちた。こんな夢が、私をわりあい早い時期にゴルフにチャレンジさせるきっかけとなった。

また、私の「好きこそもののしようずなれ」の信念でいけば、カメラ同様、ゴルフもなんとかできるようなならないはずはない、とも考えた。

そこで「ゴルフができること」を運動の目標に取り上げたが、結果から見ると、それは明らかに「困難で当面は不適切で高度な目標」だったと言える。私の肉体は、まだ「単純な筋肉の運動をやつと行う」ことができる段階だったのである。

つまり、単に腕を伸ばす動作だけであればできても、肩の後ろに振り上げた腕を、肩の回転をしながら伸ばして体の正面に振り下ろすという、一連の動作はむずかしいのである。実際に、腕は体の正面に来ているのに、腕の筋肉は真つすぐには伸びきれないのである。筋肉を伸ばすには、もっと長い時間が必要なのであった。健康なときには瞬間的にできた動作が、今は数秒という時間が必要になるのだ。

多くの筋肉が共同して一つの目的を遂げる一連の肉体運動というものが、どんなに困難かということとを、そのころの私は十分に知らなかった。

私は仕事をしていたとき、どんなに困難な課題でも、どこかに解決の道があると信じて仕事を進めることを常としていた。したがって問題が困難であればあるほど、問題を小さく絞り込み、重要と思われる点をはっきりさせた上で全精力をこれに注いで解決する。一つの関門を突破すると、その周辺の問題も一気に解決したものであった。こんな経験が私のリハビリ目標をきめるときにも、影響していた。

私は、「ゴルフをする」という大目標を達成するために、この大目標を「単位運動」にまで分解・細分化し、この「単位運動」を順番に訓練することにした。その上で再びこの「単位運動」を集めて、最初考えた大きなシステム運動であるゴルフに結びつければ、たぶんうまくいくだろうと考えたのである。

私が「ゴルフを再開する」と友人に宣言したとき、この目標を達成するのに必要な時間はおよそ二、三年と見当をつけていたが、まだまだ目標には程遠い。夢の中では、とてもうまくクラブを振り抜いているのに、実際には未解決の課題がたくさんあった。

白球が空を飛んだ日

そこで私は改めて妻とゴルフ練習場に行き、自分で自分の動作をチェックして、課題を整理することにした。練習場の受付では私の体を見て、ちよつと不審そうな顔をしたが、妻は黙って手続きをす

ました。逆に私は不安になりそうだったが、ここで尻込みしてはいけないと「堂々」と入り、練習を始めた。おかげで具体的な課題は大体つかむことができた。

それを整理してみると、次のようになる。

1. ボールをティーアップするときに腰をかがめることができない。
2. そのときに右手でボールを握ってティーアップができない。
3. スタンスを取って構えるときに足元の微調整をするが、上げた右足がふらついて思うところに足が構えられないから、希望の位置に足がおけない。
4. 右手の指を開いてクラブを無理に握らせても、すぐに手から離れてしまう。
5. テイクバックしたときに右足の膝がだらしなく外に開いてしまう。まだ膝を内側に押し込んで、力をため込むことができない。

6. そのときまた、脇腹の筋肉が縮んでいて、体をひねるだけで痛みが起きる。

7. その際、左の肩越しにボールを見ようとしても、首の筋肉が痛くて回せない。

8. ダウンスイングに入ると、クラブヘッドの動く線が不安定でコントロールできない。

そこで、私がこれらの課題を解決するために取り上げた訓練は、次の運動による強化対策である。

①お相撲の力士が仕切りに入るときのように、腰を割って踏ん張る体操をする。これによって、腰をかがめる筋肉と関節の柔軟化を図る。

②右肩・腕・肘・手首・指と、右半身の運動を続けるが、成果を急いでも無理があるので、慌てず無

理はしないことにする。

③毎日歩くときに、右足の内腿の筋肉を意識を集めて、内腿の筋肉の強化に努める。

④階段を上るときには、足が外に回らぬように意識し、まっすぐに足を上げるよう注意する。エスカレーターに乗るときは、いったんそろえて踏み板に乗せた後で、上りのときは右足を前に、下りのときは右足を後ろの踏み板に乗せる。こうして両足を上下にずらせると、股・膝・くるぶし・足指の各関節が程よい刺激を受ける。

⑤ラップの紙筒を使って手首の関節を柔軟にする運動と、親指を屈伸させる運動を続け、親指の強化を図る。これで右手が戦力になることを狙った。

⑥音楽に合わせて体をねじる運動、特にダンス音楽に合わせて体をひねり、肩や腰を動かす。この運動は楽しい。また歩くときは右肩を前後に動かすように気をつける。

⑦一日に数回は首筋を前後左右に動かして、首の筋肉を柔軟にするよう努める。

⑧以上の総合結果により全体の力をつけ、運動をコントロールできるようにする。

やがて、六十三年になり、この一年間の努力の成果を練習場に出て実際にボールを打ってチェックする日がやってきた。どの程度のことができるか。私が弱音を吐けば、後ろで心配そうに見ている妻が「もう帰りましょう」と言うだけなのだ。

「ここまで来たんだ、弱音が吐けるか、ボールを飛ばすまではあきらめないぞ」

クラブを握りしめた、握れた。ゆっくりテークバックしたが、大きいスイングは無理だ。ダウンスイングに入った。当たらない、空振りだ。

「おや！なぜだ？」手元を見ると、まっすぐ伸びていなければならぬ右手の肘が、縮んで伸びきれず、「く」の字に曲がったまま、私の体の正面を通り過ぎるので、ボールの手前をクラブは通過していた。

なるほど、そうだったのか。じゃあ、もう一つ慎重に。数回目にやっと肘を曲げた形をそのままにしてインパクトに持ち込むことを考えついた。そしてようやくクラブのフェースがボールを正しくとらえた。

「コッソ」

ちよつと頼りない音が響いて、白球はゆっくりと弧を描き空を飛んでいく。

「おい、飛んだぞ！飛んだぞ！」

「あらっほんとっ！飛んだっ！あなたの球が飛んだのね、よかったわね」

夫婦は喜び合った。なんとも表しようがないほどのうれしさだった。

その日の収穫は、強化の必要な点が幾つか明確になって、次の訓練の目標が作れたことである。思ったほどには当たらないことが課題であった。右手の握り、腰の回転、しゃがみ込む姿勢、右足の内股の筋肉を強くすることを毎日の訓練に取り入れる。

だが、こんな課題を一つずつ乗り越えても、あの軟らかい、ふかふかしたゴルフ場のラフの上を歩

けるだろうか。また、足元を見詰めて歩くことに一生懸命になっていながら、同時にプレーすることが果たして可能だろうか。

そんな不安は常に私を襲うが、私は好きなゴルフをもう一度やりたいと思う。好きなことができるようになるためには、苦労は苦労にならない。「明日を思いわずらわず」今日を精いっぱい生きてゆけただけだ。

そのとき妻は

札幌の病院で、「この病気はうつになりやすいから気をつけてください。うつになるとほけるのも早いから」と注意をいただきました。「さて、私はどんなことをしたらよいのかしら？」と考えて横浜へ帰ってきたのですが、私がまずしたことは車を求めることでした。

免許は持つておりましたが、十年近くも乗っていないペーパードライバーでしたから、大急ぎで教習を受けました。この車を使って私たち夫婦は積極的に外出することにしたのです。

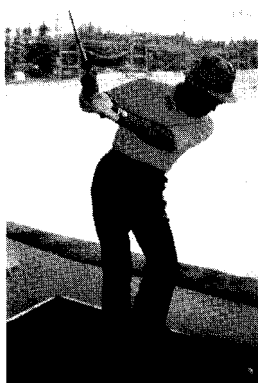
夫のリハビリ訓練を兼ねていましたから、行く先もおのずから幾つかに制限されます。最初は近くを、でも、なれてくるにつれだんだんと遠くまで出かけ、高速道路も使いられるようになりました。

好きなゴルフをやりたい一心で練習に励む。▶右手の指に力ががないので、クラブを握るのに一苦労。

▼足元の微調整、構え、スイングのテークバックなど、難問は多かったが、日常生活でもゴルフを念頭において訓練した結果、ボールが飛んだときのうれしさは……



●ゴルフの再開を目標にリハビリ



雨の日など、夫が外を歩けないときは、大型スーパーやデパートにいったしょに行き、屋内で歩行訓練しますが、気分転換もしたいときは、小田原の大雄山とか日向薬師の山道や、三浦半島の磯や砂浜の海岸に出かけました。写真を撮りたいと夫からの注文があると、鎌倉とか藤沢方面にもよく出かけます。そんなときは、魔法びんにお茶を入れて、有り合わせの材料でお握り弁当を作って出かけます。

夫は、写真を撮りながら次第に古いお寺の由緒に興味を持ち始め、それが進んで鎌倉時代の文化とか、「吾妻鑑」などに興味を広げていき、強いつに陥る暇もないように過ごしてくれたのは、ほんとうにうれしいことでした。